

# 隅田公園入口案内板の作成・設置~向島歴史観光案内板のリニューアル

研究期間：令和3年4月~令和6年3月（3年目・最終年度）

## 研究担当者

小野健太教授  
原寛道教授  
根津孝太教授  
青木宏展助教授  
高木正太郎特任研究員

## 研究参加者

デザイン文化計画研究室  
システムプランニング  
研究室  
環境デザイン研究室  
学部生5名  
-  
墨田区観光課2名

## 受託研究の目的

本研究は、墨田区向島地域を対象に、新たな観光モデルの考案をしました。隅田公園におけるピクニックの提案、実験、それに付随したマップやホームページなどの作成を行いました。東京スカイツリーと浅草の間に位置する向島地域は、東京スカイツリー竣工当時は多くの人を訪れると予想されていました。しかし現状では向島地域まで足を運ぶ観光客は少ない状況です。本研究では向島地域の観光活性化及び回遊性向上を目的としました。

## 活動内容

フィールドワーク、地元住民へのヒアリングから向島地域には魅力ある飲食店がたくさんあることがわかりました。観光において食というコンテンツは重要であり、いくつかの飲食店を回ってもらうことが、自然と向島地域の回遊になると考えました。一度の機会です複数の飲食店を訪れてもらうために、テイクアウトという形態に注目しました。そして、テイクアウトした商品で、隅田公園でピクニックをする「すみピク」を提案しました。隅田公園は芝生が整っていることに加え、スカイツリーも綺麗に見えるため、ピクニックに適していると考えました。また、近年若者の間で、おしゃれピクニック通称「おしゃピク」というものが流行しています。近年のアウトドアブームで「キャンプ女子」や「ソロキャンプ」など、新しいアウトドアの楽しみ方が次々と生まれている中、2017年ごろからメディアやSNSでも「おしゃピク」が話題になっています。おしゃピクの楽しみ方のひとつに「映えること」があります。SNSで写真映えするような小物やカトラリー、スイーツ、ドリンクを使用します。隅田公園は、スカイツリーから徒歩約5分の距離にあり、スカイツリーが見えるため写真映えも期待でき、おしゃピクに適しているといえます。隅田公園でおしゃピクを流行らせることで、観光客の自発的な情報発信を促し、より多くの人に向島に足を運んでもらえるのではないかと考えました。この活動に付随したロゴ、広告物、ホームページの作成のほか、向島歴史散策案内板のリデザイン及び情報のアップデートが可能なデジタルマップの作成を行いました。



「すみピク」ロゴ



街歩きの様子

2020・2023

墨田区受託研究成果集



リデザインした向島歴史散策案内板

街歩きでもらえる花札風のカード「花街札」

### 得られた成果・知見

観光モデルとしての効果を検証するために、計3回の予備実験を行いました。参加者には事前にマップを共有し、飲食店でテイクアウトをしながら向島地域を回遊してもらい、隅田公園でピクニックを行いました。希望者は着付けをして実験に参加しました。実験後、参加者を対象にアンケート調査を実施したところ、「ピクニックという最近してなかったコンテンツであり、太陽の下で食べるご飯が美味しかった。また行ったことのないお店、普段なかなか入らないようなお店に入れた。」「たくさん可愛い写真が撮れたし、良い天気の中美味しい食べ物を外で食べることが出来て満足です。向島がコンパクトなので、テイクアウトで歩き回る際浴衣を着ていてもそこまで疲れなくて良かったです。今回はピクニックの用意や写真撮影など何から何までやって頂いたの、いざ自分達で全部やるとまた感想が違ってくるかなと思いました。」「公園で話しながらお菓子を食べたり話したりしたことが純粹に楽しかったです。埼玉屋小梅の店員さんが話しかけてくれて会話が盛り上がったので、そういった交流から街やそこで暮らす人達への興味に繋がってくるのではないかなと思いました。」といった回答を得ることができました。



「すみピク」予備実験



# 人と自然が共生する生活環境の実現に向けた調査研究 粗放かつ持続的な屋上緑化手法の開発

研究期間：令和3年4月～令和6年3月（3年目）

研究担当者  
霜田 亮祐 准教授

研究参加者  
風景計画学  
研究室学生  
博士課程1名

墨田区環境保全課3名

## 受託研究の目的

本研究は、屋上緑化における粗放かつ持続的な施工・管理手法の開発を目的としている。屋上緑化はヒートアイランド緩和や貯水機能など様々な生態系サービスを有し、都市環境改善を目的に2000年頃より急速に普及が進められた。しかし、普及の原動力となったセダム類を主体とした屋上緑化は、管理不足による荒廃や種多様性に乏しい問題があり、灌水や除草などの管理労力を極力省いた粗放管理下においても生態系サービスを維持する緑化手法が求められている。そこで、本研究では在来の海浜植生種を含む多様な植物種と無機質系人工軽量土壌を用いて、区内中学校屋上で2年に渡り実証実験を行ってきた。昨年度は、地形による環境の多様化や適切な植栽基盤の選択により多様な植物種が成育可能であることが示唆された。今年度は、引き続き粗放管理下での植生動態をモニタリングし、より長期のデータを蓄積することを目的とした。

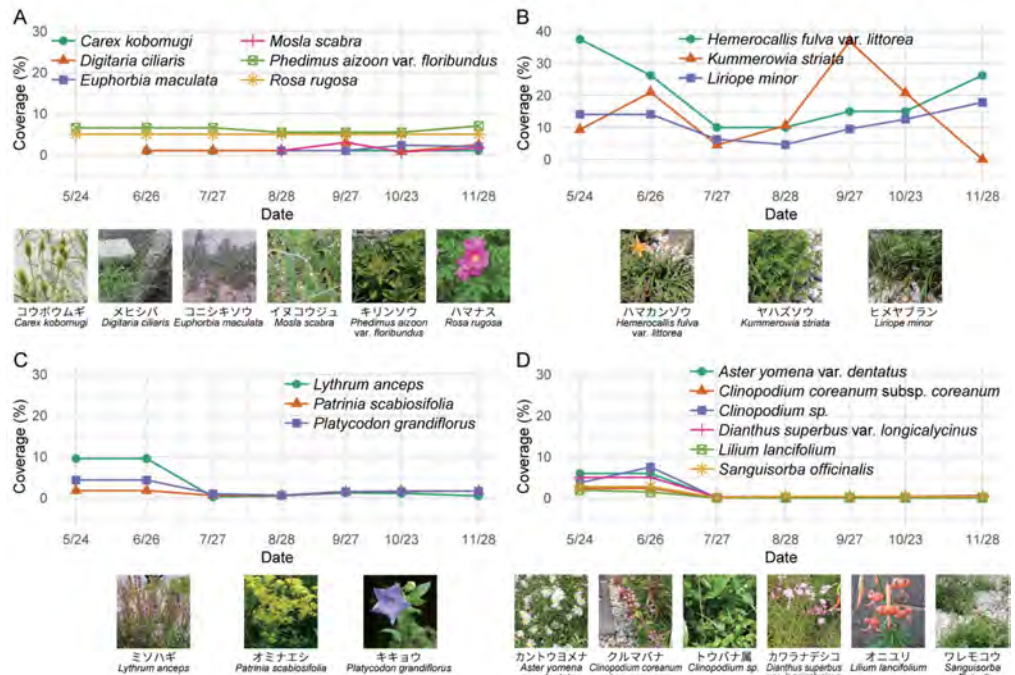


高温乾燥期(7月27日)の屋上緑化の様子

## 活動内容

実証実験の緑化区画内に1m×1mのコドラートを9つ設置(図1)し、5～11月まで月一回植生調査を行った。植生調査では出現植物種と被度(ブラウン・ブランケ法)を記録した。調査の結果、計51種の出現が確認されたが、夏場の極端な寡雨により生育不良あるいは枯死に至る種が多くを占めた。このうち代表的な種について被度推移の特徴からグループ分けを行った(図2,3,4,5)。グループAは乾燥ストレスの影響が軽微であった種群である。このうちコウボウムギ、キリンソウ、ハマナスは海岸の砂浜や岩場に自生する種であり、屋上においても高い耐乾性を発揮したと考えられる。また、メヒシバ、コニシキソウ、イヌコウジュは一年草で生活史が短いため、一時的な水不足の影響が少なかったと推察される。グループBは乾燥ストレス後の回復率が高かった種群である。3種はす

べて海浜に自生する種であり、海浜植物の耐乾性が確認されたといえる。とくにヤハズソウの回復・拡大は著しく、ある調査区では被度が90%近くに達した。これには耐乾性だけでなく、一年草で生育が速いことやマメ科植物であることなど複数の要因が関わっていると推測される。グループC、Dはいずれも水不足の影響が大きかったグループであり、Cの種は多少の回復が認められた一方でDの種は著しく衰退または消滅した。これらの種は今年度のように夏季に4週間近く雨が降らない状況下では無灌水での生育は難しい。ただし、ほとんどの種は昨年度の同時期に最長で2週間程度まとまった雨が降らない状況下でも問題なく生育していたことを考えると、この時期のみ灌水を行うことでパフォーマンスを維持できる可能性が高い。



グループごとの代表種と被度変化

### 得られた成果・知見

今年度は7月に4週間近く雨が降らなかったことにより、植栽種の耐乾性が明らかとなった。海浜環境に自生する種は総じて耐乾性が高く粗放管理下の屋上緑化に適する。また、春と秋の夏場の乾燥期以外の時季を主な生育期間とする一年草も同様に適性がある。一方、その他の種であっても高温乾燥期に最低2週間に一度の水分供給があれば存続可能であることから、この時期のみ灌水をおこなう選択肢も考えられる。開花期が長く植栽パフォーマンスの高い種の多くはC,Dグループに属するため、より多様な種の成育には一時的な灌水が最低限必要なコストといえるだろう。



人と自然が共生する生活環境の実現に向けた調査研究  
 粗放的かつ持続的な屋上緑化手法の開発  
 (参考資料①)



〇〇〇〇年〇月〇〇日(施工後約〇か月)



〇〇〇〇年〇月〇〇日(高温期)



〇〇〇〇年〇月〇〇日

年目の植生動態

和名	生活型	調査月										最高草高 (m)	学名
		5	6	7	8	9	10	11					
アカマツ	高木											1.3	<i>Pinus densiflora</i>
ハマナス	低木 海											0.4	<i>Rosa rugosa</i>
スマレ	多年草				fr	fr						0.1	<i>Viola mandshurica</i>
オニタビラコ	一年草	f			消失							0.05	<i>Youngia japonica</i>
ミツバツグリ	多年草	f								d		0.1	<i>Potentilla freyniana</i>
ミミナグサ	一年草	f			消失							0.1	<i>Cerastium fontanum</i> subsp. <i>vulgare</i> var. <i>angustifolium</i>
ウツボグサ	多年草		f		fr	fr						0.1	<i>Prunella vulgaris</i> subsp. <i>asiatica</i>
オカトラノオ	多年草		f									0.2	<i>Lysimachia dethroides</i>
オミナエシ	多年草		f	f	f	f	f,fr	fr,d				0.8	<i>Patrinia scabiosifolia</i>
キリンソウ	多年草 海		f		f	fr	fr	d				0.2	<i>Phedimus aizoon</i> var. <i>foribundus</i>
チダケサシ	多年草		f				消失					0.4	<i>Astilbe microphylla</i>
ネジバナ	多年草		f	d								0.2	<i>Spiranthes sinensis</i> subsp. <i>australis</i>
ヒメヤブラン	多年草 海		f		fr	fr	fr					0.1	<i>Liriope minor</i>
ミソハギ	多年草		f	f	f	f,fr	fr	fr,d				0.7	<i>Lythrum anceps</i>
オオバギボウシ	多年草			f	f							0.6	<i>Hosta sieboldiana</i>
オニユリ	多年草			f		fr,d	d	d				0.5	<i>Lilium lancifolium</i>
カワラナデシコ	多年草			f	f,fr	f,fr	f,fr	f,fr				0.5	<i>Dianthus superbus</i> var. <i>longicalycinus</i>
カントウヨメナ	多年草			f	f	f	f,fr	fr,d				0.9	<i>Aster yomena</i> var. <i>dentatus</i>
キキョウ	多年草			f	f,fr	f,fr	fr	fr,d				0.6	<i>Platycodon grandiflorus</i>
オトギリソウ	多年草				f	fr	fr	fr,d				0.3	<i>Hypericum erectum</i>
キツネノマゴ	一年草				f	f	f,fr	fr				0.1	<i>Justicia procumbens</i>
クルマバナ	多年草				f	f,fr	f,fr	d				0.2	<i>Clinopodium coreanum</i> subsp. <i>coreanum</i>
コニシキソウ	一年草 帰				f,fr	fr	fr					0.1	<i>Euphorbia maculata</i>
ハイヌメリグサ	一年草				f	fr						0.3	<i>Sacciolepis spicata</i> var. <i>spicata</i>
ヒヨドリバナ	多年草				f	f	f,fr	fr,d				0.8	<i>Eupatorium makinoi</i>
ワレモコウ	多年草				f	f	f	fr				0.6	<i>Sanguisorba officinalis</i>
イヌコウジュ	一年草					f	fr	fr				0.3	<i>Mosla scabra</i>
ゲンノショウコ	多年草					f	fr	fr,d				0.05	<i>Geranium thunbergii</i>
コブナグサ	一年草					f	fr	fr				0.2	<i>Arthraxon hispidus</i>
ノコンギク	多年草					f	f	fr				0.5	<i>Aster microcephalus</i> var. <i>ovatus</i>
ハマカンゾウ	多年草 海						f					0.6	<i>Hemerocallis fulva</i> var. <i>littorea</i>
ヒメジソ	一年草						f	fr	fr			0.3	<i>Mosla dianthera</i>
ヤハズソウ	多年草						fr	d				0.4	<i>Kummerowia striata</i>
ヤブマメ	一年草							fr	fr			0.3	<i>Amphicarpaea edgeworthii</i>
イソギク	多年草 海											0.3	<i>Chrysanthemum pacificum</i>
エノキグサ	一年草											0.05	<i>Acalypha australis</i>
セイトカアワダチソウ	多年草 帰											0.2	<i>Solidago altissima</i>
ヒメジョオン	多年草 帰											0.05	<i>Erigeron annuus</i>

※ 海は海浜植物、帰は帰化植物を表す

※ fは開花、frは果実または種子、dは落葉状態を表す



# 人と自然が共生する生活環境の実現に向けた調査研究

墨田区の家庭部門におけるカーボンニュートラルの取り組みを題材とした環境学習用Web教材の制作

研究期間：令和3年4月～令和6年3月（3年目）

研究担当者

三島 孔明 准教授

研究参加者

環境教育学研究室学生

博士後期課程1名

博士前期課程1名

学部生4名

墨田区環境保全課3名

## 受託研究の目的

地方公共団体にとって環境問題への対応は重要な活動の1つであり、その活動推進のためには、環境問題に対して住民が理解し、関心を持つことが必要である。そのため、住民の理解・関心の向上に効果的な情報普及も地方公共団体にとって重要な課題である。本研究は、「人と自然が共生する生活環境の実現に向けた調査研究」の課題の1つとして、墨田区民を対象とし、環境問題に対する理解・関心の向上に資する情報普及の1つとなる環境学習教材の考案・制作を目的とした。

表1 環境問題に関する墨田区民の認識・関心の調査の結果

分野	認識の程度		関心の程度	
	内容まで知っている	名称を知っている	今後取り組みたい	関心がある
緑化の推進	△	○	△	○
省エネルギーの行動	×	○	△	○
再生可能エネルギーの導入	×	○	△	○
その他・地球温暖化	×	○	△	○
ごみの発生抑制と有効活用	×	○	△	○
雨水の有効活用	×	○	△	○
エネルギー利用の効率化	×	○	×	○
廃棄物の適正処理	×	○	×	○
気候変動への適応	×	○	×	○
生物多様性の保全	×	△	×	○

○…回答者の割合が有意に多い、△…回答者の割合に有意差なし、×…回答者の割合が有意に少ないことを示す

## 活動内容

1年目（令和3年度）では、墨田区民を対象とした環境学習教材の考案のための基礎的資料を得るために、区民の環境問題に関する認識・関心の傾向の把握を行った。また、行政が作成した環境学習教材の事例の工夫等を把握する調査を行った。☒ 2年目（令和4年度）では、前年度の調査結果と墨田区の要望を踏まえ、家庭でできるカーボンニュートラルの取り組みについて、その効果とともに具体的に知ってもらえるWeb教材の試作版を作成した。☒ 3年目（令和5年度）では、2022年度版のWeb教材の改善点について、墨田区環境保全課及び関係部署の職員の方々から説明の補足や見やすさの改善に関するフィードバックをもらい、それに基づいた修正を行った。また、2022年度の試作版は家の中でのカーボンニュートラルに関する取り組みについて作成したものであったが、家の外での取り組みで実践しやすいものを検討し、追加した。その後、修正版のWeb教材を墨田区役所職員に評価してもらい、改善案を検討した。

## 得られた成果・知見

1年目（令和3年度）の環境問題に関する墨田区民の認識・関心の調査の結果、環境問題に関する活動にすでに取り組んでいる人は、10の分野いずれにおいても有意に少なかった。取り組んでいない人に絞って認識・関心の程度をみると、「緑化の推進」の分野に関しては、他分野に比べて認識・関心のある人が比較的多かった。「省エネルギーの行動」「再生可能エネルギーの導入」「その他・地球温暖化防止」「ごみの発生抑制と有効活用」「雨水の有効活用」「エネルギー利用の効率化」「廃棄物の適正処理」「気候変動への適応」の分野に関しては、内容まで認識している人は少なく、さらに今後の取り組み意欲のある人は半分程度、または少なかった。そして「生物多様性の保全」の分野は、内容まで認識している人が少ないだけでなく、名称の認識のある人も半分程度であり、今後の取り組み意欲のある人も少なかった。

2年目(令和4年度)に作成した試作版のWeb教材では、家全体を示した画面から各部屋等へ移動し、各部屋等のページからは、その場所のできるカーボンニュートラルの取り組みを説明したページへ移動する構成とした。また、各取り組みのページでは、その取り組みによる二酸化炭素の削減量と節約金額の情報を掲載した。☒ 3年目(令和5年度)では、2022年度の試作版について墨田区環境保全課ほかの職員の方々から改善に関するフィードバックをもらい、それらに基づいて修正を行った。さらに、家の中だけではなく家の外に関する取り組みも追加することとし、画面構成を大きく変更した修正版を作成した。

修正版Web教材のサイト構成は図1のとおりであり、全部で76のカーボンニュートラルに関する取り組みを掲載した。トップ画面は街全体の画像とし、商業施設、交通機関、公園、家の4つのエリアを配置した。クリックすると、それぞれのエリアの全体像、部屋等、場面、と順に移動し、場面内の虫眼鏡アイコンからカーボンニュートラルに関する取り組みの情報がポップアップ式で表示されるようにした。

この修正版Web教材について、墨田区環境保全課ほかの職員の方々から評価してもらった結果、取り上げた取り組みの内容や説明・絵のわかりやすさは、おおむね問題のないものであったと考えられた。一方、イラスト等のデザイン性の向上や操作性の向上、紹介内容の充実、追加に関する課題があると考えられた。

今後は、評価で指摘のあった修正や内容充実のほか、カーボンニュートラルに関する取り組みについての理解度がわかるクイズ等を追加することで、学びと行動の動機づけの向上が期待できると考えられる。また、1年目の調査で区民の認識や関心の程度が低かった生物多様性に関する内容を内容とした教材の作成も必要と考えられる。

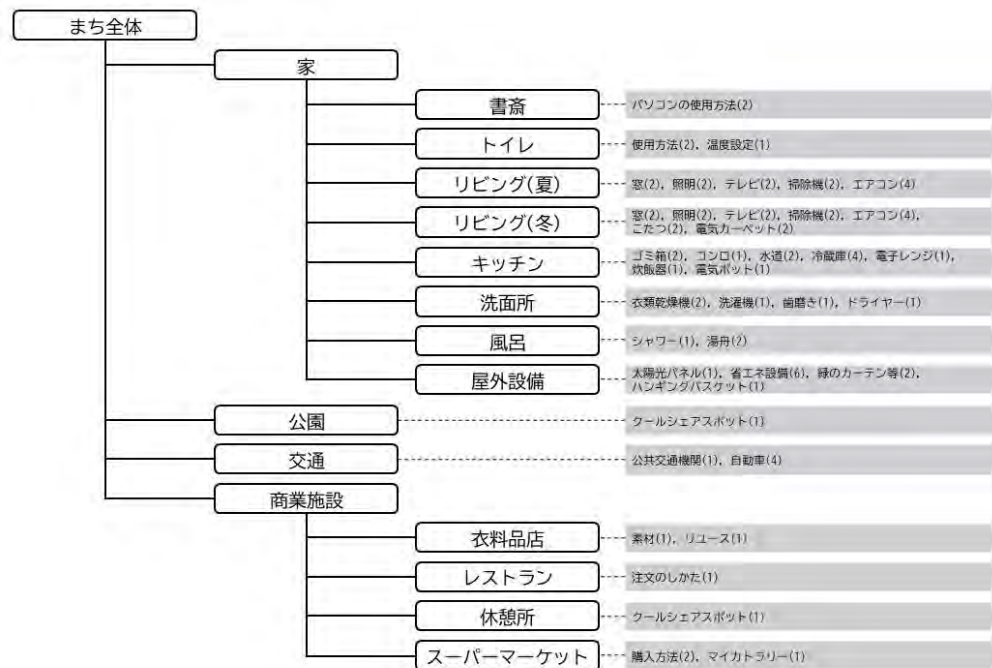


図1 制作したWeb教材のサイト構成

人と自然が共生する生活環境の実現に向けた調査研究  
墨田区の家庭部門におけるカーボンニュートラルの取り組みを題材とした環境学習用Web教材の制作  
(参考資料)

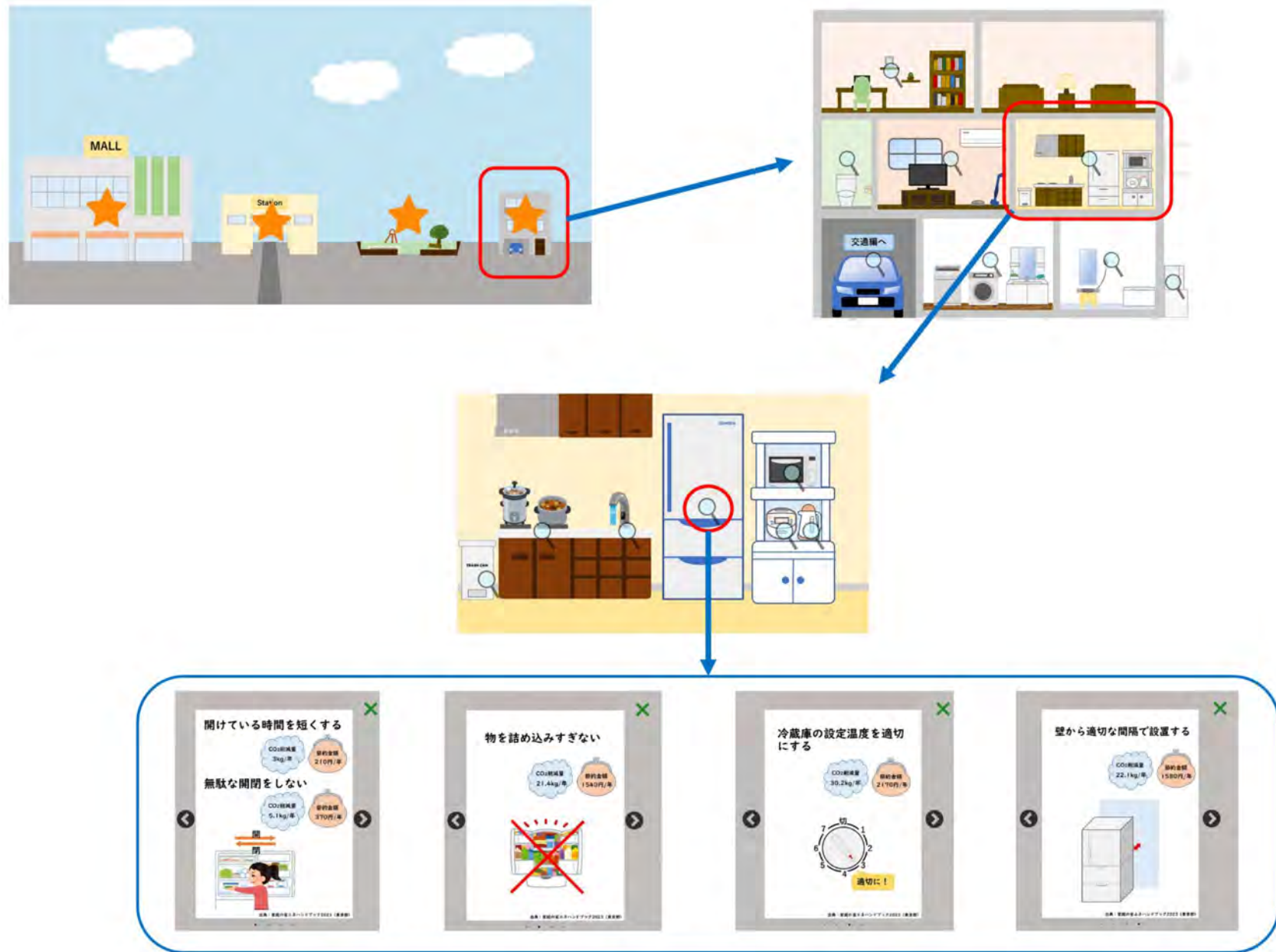


図2 Web教材のサイトの構成・取り組み紹介の例



# UDCすみだの知名度向上・ブランディング戦略に関するデザイン研究

研究期間：令和5年5月6日～令和6年3月1日

## 研究担当者

張 益準 准教授

## 研究参加者

コミュニケーション

デザイン研究室

学生

修士課程4名

学部生3名

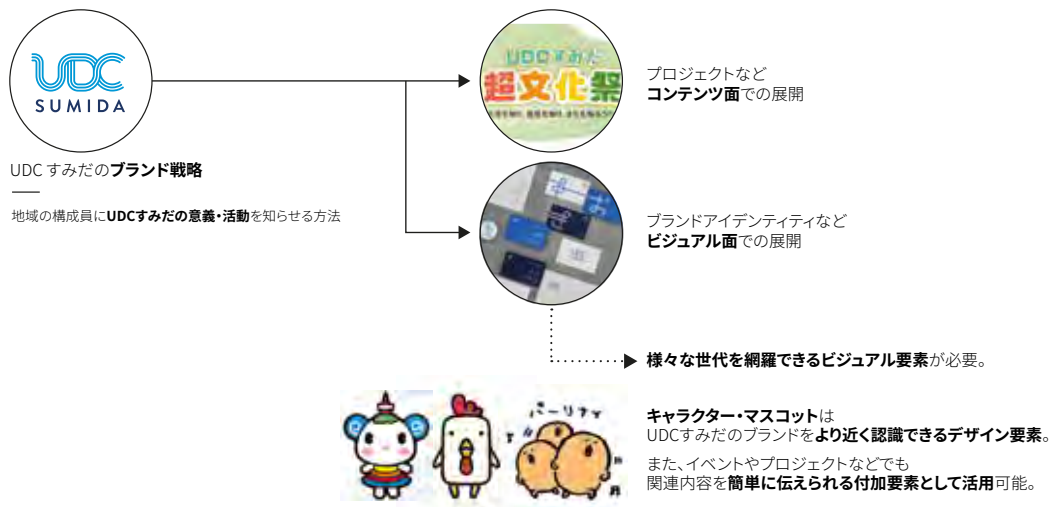
墨田区企画政策課1名

## 受託研究の目的

墨田区が進める大学誘致を契機として、令和3年4月に発足した公民学連携組織「UDCすみだ」について、大学のあるまちづくりをさらに推進するため、UDCすみだの知名度向上を目指しています。令和2年度にUDCすみだのブランディングデザインを作成したのを皮切りに、令和3年度にはブランディング・アクティビティのデザインが検討されました。これらの内容を踏まえ、2023年度には、UDCすみだをまだ知らない区民にどのように認知させるかについて研究を進めました。

## 具体的な研究の進行

UDCすみだの知名度向上を目的として、2023年度に新しいブランディングアプローチが検討されました。特に、地域住民に親しみを持ってもらえるようなキャラクター・マスコットのデザインが提案され、以下のステップを通じて具体的な研究が行われました。



## UDC in SUMIDA のマスコット

### 墨田区の基本計画による地域の区分

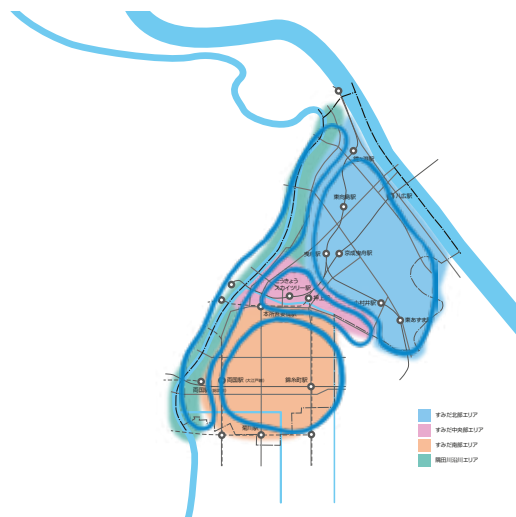
それぞれの地域から由来するさまざまなキャラクター群の構成。

- すみだ北部エリア
- すみだ中央部エリア
- すみだ南部エリア
- 隅田川沿川エリア

### 墨田区・地域に流れるいろんな川

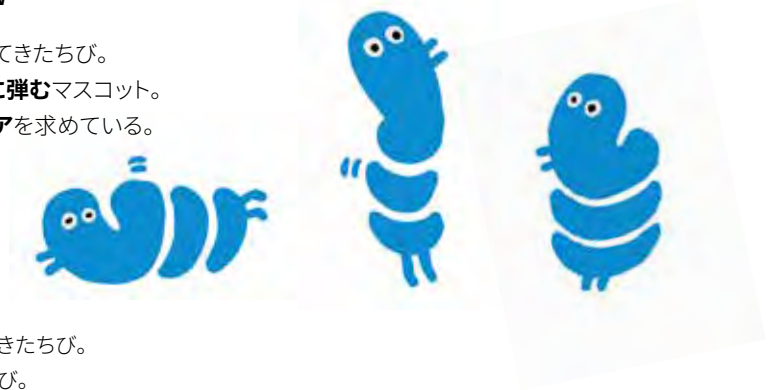
水をモチーフにするキャラクターの構成

- 隅田川・荒川・旧中川・北十間川など



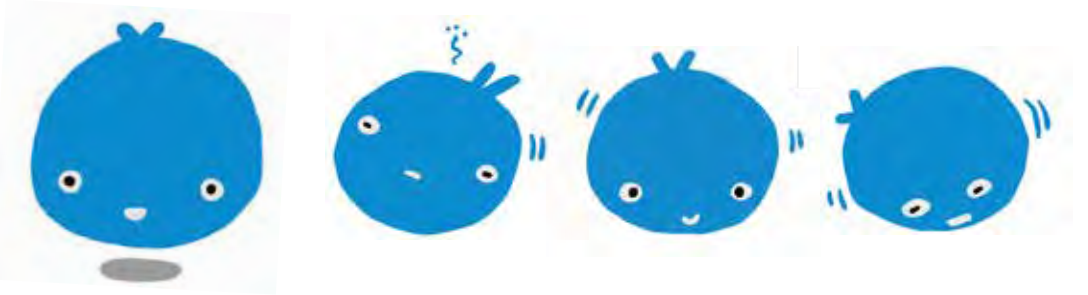
### みちび・ショー SHOW

隅田川沿川エリアからでてきたちび。  
いつもスプリングのように弾むマスコット。  
常に新しい遊びやアイデアを求めている。



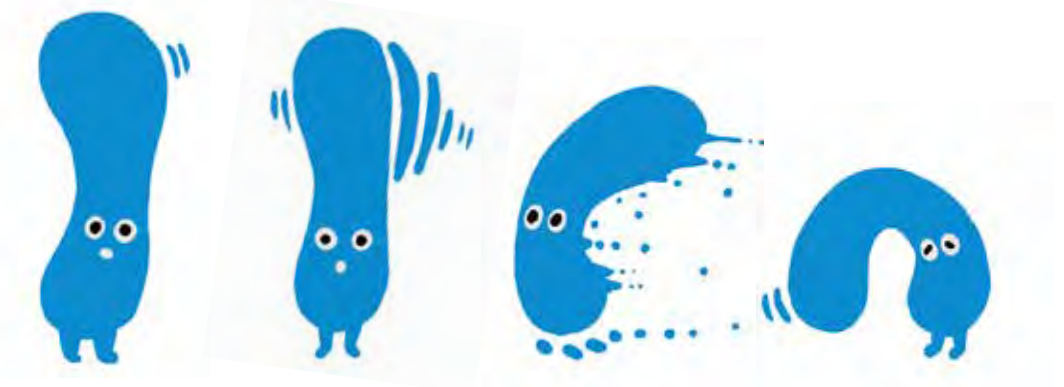
### みちび・ミニ MINI

すみだ南部エリアからでてきたちび。  
いつも丸々と遊んでいるちび。  
いつも横になっているが、動く時は限りなく軽く飛び回る。



### みちび・チュー CHU

すみだ中央部エリアからでてきたちび。  
一刻もじっとしていないちび。左右に動き回って熱心に走り回る活発な性格。



### みちび・ホキ HOKI

すみだ北部エリアからでてきたちび。  
いつでもどこでもバランスの良いちび。周りでバタバタ遊んでも、真ん中でみんなの面倒を見ている性格。





# 区民の健康度評価研究

研究期間：令和3年4月～令和6年3月（3年目）

## 研究担当者

花里 真道 准教授  
平石 智美 特任研究員  
CHEN YU RU 特任研究員  
吉田 紘明 特任助教  
松岡 洋子 特任助教  
江口 亜維子 特任研究員

## 受託研究の目的

世界に先駆けて、超高齢社会に直面する日本において、一人ひとりの健康寿命をどう延ばすか、さらには、人口減少を伴う少子高齢社会の中で社会保障制度の持続可能性をいかに確保し続けるか、これらの問題に真摯に取り組むことが必要であり、データヘルス改革の強力な推進が、解決のための重要な糸口の一つとなっている（国民の健康確保のためのビッグデータ活用推進に関するデータヘルス改革推進計画 2017）。

このような昨今の状況を踏まえ、本研究では、墨田区と千葉大学のパートナーシップのもと、区が保有する各種調査・統計データ及び実証実験により得られたデータなどを活用し、区民・地域の健康度を多角的な視点で捉え、分析及び評価を実施した。本研究結果を基に、墨田区民の健康寿命の延伸及び健康格差の縮小へと繋げることを目指す。

## 研究項目

### 1. 介護予防ニーズ調査結果の分析

→ 次ページに結果の一部を記載

2019年と2022年に取得された介護予防ニーズ調査（以下、「ニーズ調査」と記す）の結果を分かりやすく示すことができるよう地域診断ツールで可視化するシステムを開発した。そして、2か年の調査結果を比較した。

### 2. 地域包括ケア「見える化」システムを活用した分析

地域包括ケア「見える化」システム（厚生労働省が運営している都道府県・市町村における介護保険事業（支援）計画等の策定・実行を総合的に支援するための情報システム）に収録された情報を分かりやすく示すため、地域包括ケア「見える化」システムに収録された最新のデータ（2016年度のデータ）を使用し、日常生活圏域ニーズ調査の結果について、墨田区の割合と他区の割合を年齢別と男女別で比較した。

### 3. 健康と暮らしの調査結果の分析

→ 次ページに結果の一部を記載

高齢者の生活習慣と健康状態をより詳細に把握するために、2021年度と2023年度に要支援・要介護を受けていない65歳以上の高齢者を対象とした質問紙調査を行った。日常生活動作、社会参加、地域環境に対する認知、ウェルビーイングなどの項目を調査した。

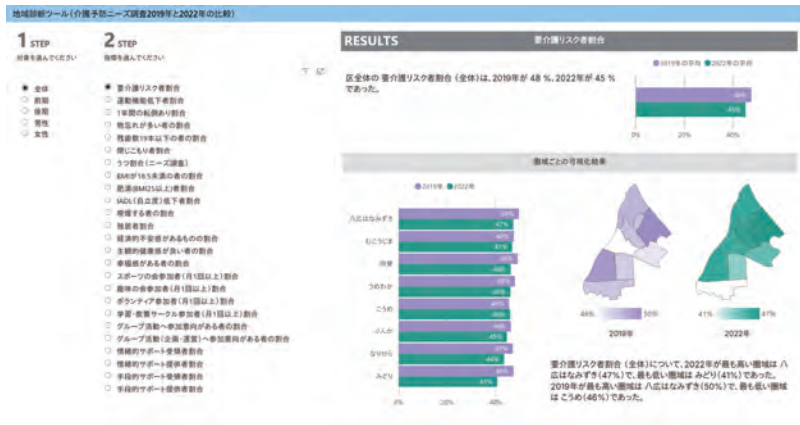
### 4. その他の分析

墨田区の通りの場のデータを整理した。また、墨田区が支援するスタートアップ企業が実施プロトタイプ実証実験でのデータを分析した。地域包括支援センターおよび東京都リハビリテーション病院と連携し、地域診断ツール（千葉大学予防医学センターが開発・運営している特定の地域の現状や問題点をデータに基づき分析・評価するために使用される方法とシステム）を活用するために、地域包括ケアに関わるスタッフを対象としたワークショップを実施した。また、住民が自分の歩幅を知り歩幅と健康との関連について理解することを目的とした歩幅測定プログラムの体験会を区民健康スポーツデーで実施した。

2020・2023

墨田区受託研究成果集

# 1. 介護予防ニーズ調査結果の分析の結果の一部



開発した健康データ可視化システム

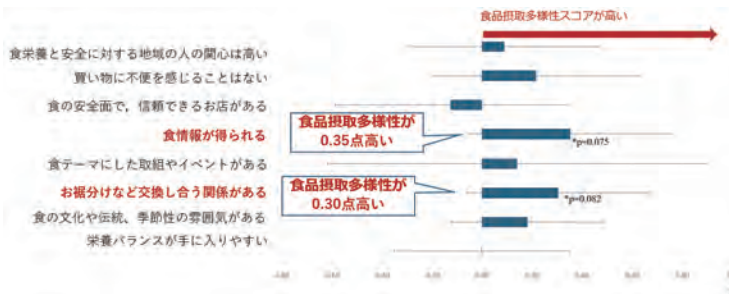
## 2019年度から2022年度にかけた結果の概要

- ・1年間の転倒あり割合、残歯数19本以下の者の割合、要介護リスク者、運動機能低下者割合が減少
- ・幸福感がある者の割合、グループ活動へ参加意向がある者の割合が増加
- ・スポーツ、趣味や学習・教養サークルの会参加者の割合、ソーシャルサポートに関連の指標に改善が見られない

## 考えられる対策

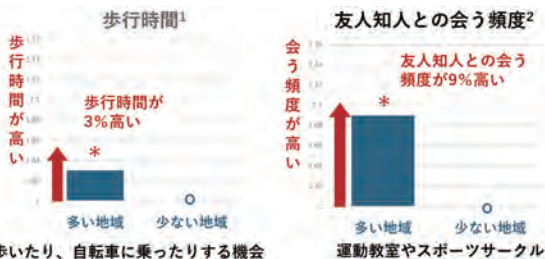
- ・高齢者の社会参加を促進するための施策の推進
- ・身体活動や交流を促進する環境の整備
- ・高齢者の行動や意識の変化を促すためのきっかけづくり
- ・既存事業の活用とともに、庁内外の関係部署や関係機関との横断的な連携の強化
- ・地域診断ツールを使用したワークショップ

# 3. 健康と暮らしの調査結果の分析の結果の一部



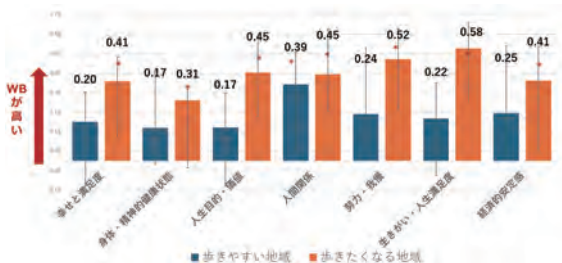
食情報が得られ、お裾分けなど交換し合う関係がある地域に住んでいる人は食品摂取多様性が高い

N=2,088人 (対象者選定：研究同意、性別、年齢欠損のない、2023年に要介護認定を受けていない) 性別、年齢、教育年数、経済状況、婚姻状況、独居有無、健康感、居住地域の影響を考慮した。\*統計的に有意差やあり、横断研究で因果関係は不明



歩いたり、自転車に乗ったりする機会が多い地域に住居する人は歩行時間が多い  
運動教室やスポーツサークルが多い地域に住居する人は友人知人との会う頻度が高い

身体活動や社会交流を促す環境6つ項目 (多い地域：よくあてはまる ややあてはまる、少ない地域：あまりあてはまらない全くあてはまらない)  
N=2,088人 (対象者選定：研究同意、性別、年齢欠損のない、2023年に要介護認定を受けていない)  
1.歩行時間 (60分以上・以下(参照値))；性別、年齢、経済状況、婚姻状況、仕事有無、独居有無、健康感、外出頻度、車使用有無、居住地域の影響を考慮した  
2.友人と会う頻度(高い・中程度：月1以上、低い程度：年に数回や会っていない(参照値))；性別、年齢、経済状況、婚姻状況、仕事有無、独居有無、健康感、外出頻度、歩行時間、車使用有無、居住地域の影響を考慮した  
\*統計的に有意差あり



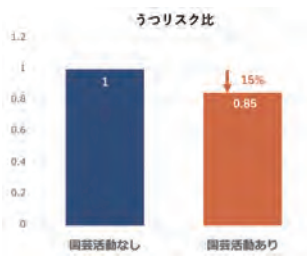
歩きやすくなる地域に住居する高齢者はその後のウェルビーイングが高い

N=2,088人 (対象者選定：研究同意、性別、年齢欠損のない、2023年に要介護認定を受けていない) 性別、年齢、経済状況、婚姻状況、仕事有無、独居有無、うつ、外出頻度、歩行時間、車使用有無、居住地域の影響を考慮した\*統計的に有意差あり 2021-2023縦断研究



全国に比べて園芸活動をする人が多い

N=2,090人 (要介護認定者を除く) ※選択肢は「している」「していない」の2件  
全国は、令和3年社会生活基本調査(総務省)「趣味・娯楽の種類別行動者数(65歳以上)」



園芸活動をしている人はうつのリスクが15%低い

N=2,090人 (要介護認定者を除く) リスク比 [95%信頼区間]：  
園芸活動あり 0.85 [0.74 - 0.97]  
※性別、年齢、等価所得、教育歴、就労の有無、同居者の有無、閉じこもり、2021年のうつ傾向を調整



# わんぱく天国のプレーパークとしての充実に向けた調査・研究

研究期間：令和2年4月～令和4年3月（3年目）

研究担当者  
原 寛道 教授

研究参加者  
環境デザイン研究室学  
生  
修士課程1名  
学部生1名  
-  
墨田区地域教育支援  
課3名

## 受託研究の目的

子どもの遊び場環境は、近年のインターネットやオンラインゲーム等の発展・普及等により、屋外から室内へと大きく変化している。また、少子化により、人口におけるこどもの割合は7人に1人と大きく下がっている。いつでも公園に行けば誰かと遊べるのは過去のイメージとなっている。そこで、本研究では、墨田区におけるこどもの遊び環境を改善することを基本の理念とし、墨田区の公共的な場で最も日常の遊び場としてこどもが集まりやすい「わんぱく天国」を対象に研究を進める。

わんぱく天国は、小学生を主な利用対象としたプレーパークとして、昭和62年4月に設置された。プレーパークの理念にあわせ、プレーリーダーが平日は2名、休日は3名常駐し、自由に工作ができる木工エリアや、木製の砦型の遊具、築山など、多くの遊び心を刺激し「自分の責任で自由に遊ぶ」公園として整備されてきた。こうした公設公営型のプレーパークは全国でも珍しく、開設当初は着目されてきたが、36年が経過して未就学児の利用が主体となり、現代のこどもが置かれた状況の変化に対して柔軟に対応できなくなってきている。36年の実績の蓄積は極めて大切な知見であり、地域との信頼関係の構築も、ほかでは無い財産である。こうした蓄積を生かしつつ、現代のこどもの置かれた困難な状況に合わせて対応していくことは喫緊の課題だといえる。

よって、本取り組みでは墨田区唯一のプレーパークである本施設の改善・充実となる試行を実施し、あわせて、屋外遊び場のリーダー世代である小中学生に着目し、遊び場デザインの可能性を研究し、今後のわんぱく天国再整備にむけた指針を明らかにする。

## 研究の方法と成果

### 1, 基本方針

昨年度まで、研究協力者の一般社団法人SSKの移動式遊び場「カラフル号」とその中に積み込む移動式遊具をデザイン実施し、取り組みを進めてきていた。(図1, 2) 本年度は、人的環境であるプレーリーダーも千葉大学学生が研究者として参画し、毎週水曜日を実証検証の日と定め、カラフル号からあそびを広げることと、異年齢のあそび集団をつくることの2つをテーマとして進めた。

### 2, カラフル号を中心としたあそびの展開の可能性(学部学生担当)

カラフル号の大きな拠点があそびを集めているが、その存在を点から面に広げるため、遊びをつなぐための遊具を提案し効果の確認をした。(図3, 4)

### 3, あそび拠点の配置による異なるあそび集団の変化(修士学生担当)

遊具のみではなく、子どもたちが小休止するための溜まり場が適切に配置されることが、小学生の異なる遊び集団をつなぎ止め、遊びを広げる構造を見出した(図5)。



図1 カラフル号と移動式遊具



図2 カラフル号と移動式遊具の実験(製作と活用)



図3 カラフル号と移動式遊具の実験の実施



図4 カラフル号を中心にガーランド型遊具で遊びの展開

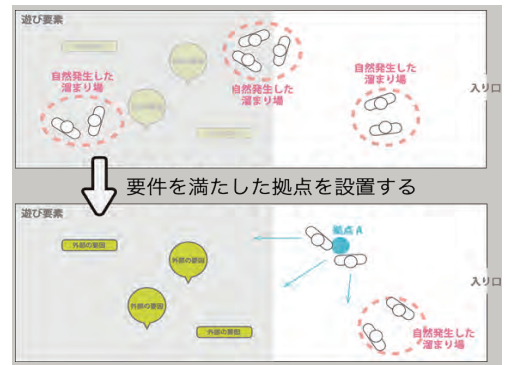
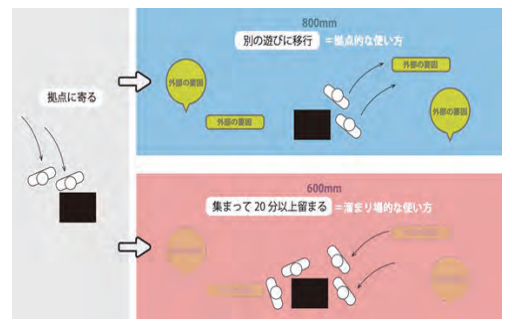


図5 遊び集団を発展させる拠点の条件